

Title	講壇社会主義 (二)
Sub Title	
Author	阿部, 秀助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1920
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.14, No.6 (1920. 6) ,p.808(70)- 820(82)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19200600-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

講壇社會主義(二)

阿部 秀助

四

五十年の歲月は講壇社會主義にとつて大概ね得意の時代であつた。ユリウス、ウァルフの所謂、戦勝の將軍として戰場を睥睨する時代であつた。(一)然かも流轉は人事の常體なるが如く、時の経過は同國に於ける一部の經濟學者をして政治的色彩の濃厚な經濟學に對して一種の反感と空虚とを感せしむると共に、一面、此學に於ける認識的價値、即ち科學としての經濟學の構成に各自の力を盡さしむるに至つたのである。而して此學の分野に於ける獨占者たる觀を呈せし講壇社會主義が批難攻撃の的となり、低氣壓の中心と化したのは此時代のことである。論者は以下斯くの如き批難攻撃が果して如何なる動機の下に生れしかを考察せんと欲す。

「リヒャルト、エーレンベルヒ」は今の獨逸の經濟學界に於て一種獨特の研究法を

代表する士であるが——彼自からは其研究法に名くるに *Exakte Wirtschaftsforschung* の名稱を以てしてゐるのである。が彼れが如何に研究法其者を重要視せることは、彼れの言に「研究法は科學に於て最も主要な意義を有するもので、云はば之れが、缺く可からざる技術である、如何に耕すかが農業者にとりて重要なるが如く、又、如何に鍛ひ如何に鑄造するかが工業家にとりて重せらるる如く、科學者及科學其者にとりて最も必要なものは徹頭徹尾、研究法である。科學によりて解決せらる可き現實は混沌として雞子の如きものである。科學は個々の原因を區別し、且つ其意義を明かにしなくてはならぬ。斯くて自然科學は實驗の手段によつて完成の地位に達せしも、之れに反して精神的科學は實驗的方法を適用すること能はざる結果、他の方法即ち比較研究を以てする必要がある。(二)即ち單に農工商に従事する當事者のみでなく、同時に手工業者、宗教家、教育家、藝術家の方面よりも普ねく材料を徴して以て問題の正當な解釋を求めんとするのである。——彼れの懷抱する科學觀によれば、科學は其自身の爲めに存するものである。斯くの如きは智的方面殊に國民經濟學にとりての最上の原則である。換言すれば科學者には客觀的な態度が必要

で、偏見に囚えらるることは之れが最も忌む處である、然るに政治家は之れに反して多少の除外例はあり *einseitig* であるのである、故に大學教授は一般に——其處にはも常に最良の科學者ではないのである、(三)而して彼れが科學者としての以上の態度は自から經濟學と政治との混同を以て此學の進歩を疎害するものと認めしむると共に、進んで特殊な階級的信條又たは黨派的信條の奴隸たんとする講壇社會主義に對する反抗的態度を高めしめたのである、勿論、彼れが徹頭徹尾、此主義を呪ふものでないことは、彼自からの言に講壇社會主義なるものは元來、科學的方面に於て最も發達せるものであつて、隨つて此方面に少からず貢獻せしものである、が、然し政治的要素は既に其初期に於て此主義中に存してゐたのである、即ち獨逸に於ける經濟學者が有する只一の科學的大會合たる社會政策學會にありて政治的傾向は既に其初期より此學の中に齎らされてゐたのである、斯くの如きは其初期に於ては避く可からざることとするも、然かも永續的に保持せらる可きものでない、何んとなれば科學は永久に政治の使僕ではあり能はぬのである、最近、政治的

意義は益々重きをなして人は講壇社會主義の政治的高潮を口にするのである、此方面に發達すると大なるに従つて、科學的生産力は益々貧弱となるのである、(四)と、更に彼れが講壇社會主義にも亦た社會主義にも満足し得ない第二の理由としては輿論の保護殊に議會選舉によつて弱者が今日既に強者となつてゐるとである、即ち下層階級の所得が中流や智識階級のそれに比して増加せるとである、而して經濟上の弱者が寧ろ他方面に現はれた事實は彼れの「*チューネン*」文庫所載の左の一高等官の家計調査が、之れを證明するのである、(五)此官吏は少しも煙草を喫まず、又酒を飲まないばかりでなく、萬事につけて非常な節儉家で、只だ時に旅行する位が彼の娛樂である、加ふるに彼れの妻たる人も家庭の經濟に長じ且つ勤勉で、尙ほ其の子女も利發で、主人は是等の子女が他日經濟上の獨立を得る手段として教育することを自分の義務と信じてゐるのである、斯くの如き人物を中心として組織せられし一家族の千八百七十六年から千九百六年の家計の狀態に就きて見るに、先づ千八百七十六年から千八百八十四年迄、彼は官吏として「*シュレンスウ*」*ハル*「*スタイン*」の任地に居たのである、が、當時、彼は小供が一人で、平均一年間の支出額は

四千二百六十二麻で之れに對して一年間の平均收入(給料)は四千三百麻、即ち差引三十八麻の剩餘金を有たのであるが、次に千八百八十五年から千八百八十九年迄伯林の附近に轉じたのであるが、此時には既に三人の小供があつて平均一年間の支出額が五千九麻、之れに對して平均一年間の給料四千五百四麻、即ち此場合には五百五麻の平均不足額を見るに至つたのである、次に千八百九十年には西普魯西に居たのであるが、其時は前任地と同じく小供が三人で一年間の平均支出額が五千四百六十四麻で、之れに對して平均一年間の給料が五千二百九十二麻、即ち差引不足額百七十二麻となり、更に千八百九十一年より千八百九十四年にかけては第四番目の任地「ホムメルン」に居たのであるが、當時家庭内にある小供三人、千八百九十三年以來は四人となつたのであるが、之れが平均一年間の支出額は六千九百四十四麻、平均一年間の給料は五千四百七十八麻、即ち之れが不足額が増加して七百十六麻となり、尙ほ千八百九十五年より千九百二年にかけては(但千八百九十六年以來は南部獨逸に轉任長子が軍人となつて家庭外の人となつた)ので、家には三人の娘があるのみで、其間平均一年間の支出額は八千五百二十麻で、給料が六千七

百二十一麻、之れが差引不足額は千四百八十四麻に増加し、最後に千九百三年より千九百六年にかけては同じく南部獨逸に居たのであるが、此時期には長男と長女とは既に家庭外の人となり、従つて家にあるのは二人の娘のみであつたが、其時の平均一年間の支出額は一萬二百五十八麻、之れに對して給料が八千四百二十三麻、即ち不足額が千八百三十五麻となつてゐる、此官吏は以上の數字の示すが如く、約三十年間に其給料が約二倍となつて居るに不拘、其収入は之れが初期を除いては自己の家族の生計を維持するに不十分なる結果を示してゐるのである、幸に此官吏は他に恩給金及個人教授或は原稿料の如き臨時の收入存せしが爲めに轉じて収入の調和を保ち、一家族の生計を維持し得しものなりとす、要するに「エーレンベルヒ」は自己の科學觀より經濟學と政治との混同を悦ばざると共に、更に勞働者の生活上に於ける改善が彼れをして主義の學問でなくて、寧ろ客觀的な現實的考察の必要を悟らしめしものである。

1. Julius Wolf, Kathedersozialismus und Wissenschaft Die Zukunft, XIX. s. 358.

2. Richard Ehrenberg, Bismark als Leistern, sozialer Erkenntnis, s. 42&43.

三、「エーレンベルヒ」の科學觀と今日、獨逸に於ける哲學者の主張する處との間には少からず共通せる點が存してゐるのである、例者、是等哲學者の見解によれば科學が認識に對する努力たることは誰人も否定せざる處であるが、然し此語の反對即ち認識に對する努力が必ずしも科學を構成するものではないのである、即ち原始的な海國民の星學の如きは科學として之れを認むることが出來ぬのである、何んとなれば之れが認識的努力が全然實際的方面に向けられてゐるからである、所謂、認識上の目的によつて科學的と實際的とを區別しなくてはならぬ、即ち科學的認識上の目的は科學が自身の目的を有することによりて表現せらる、換言すれば科學は其自身の認識を求むる爲めの認識に對する努力である、但、以上にては科學の意義は未だ充分でない、何んとなれば個々の事實の統一なき蒐集は論理上の意義に於ける科學を構成しないのである、之れある爲めには以上の定義を更に限定して科學は認識其者の爲めの統一的認識に對する努力を意味するものである。(Hodt Engert, Teleologie und Kausalität s. 4-5)

四、R. Ehrenberg, s. 41

五、Thünen-Archiv, 2B s. 318-332.

五

「ルードウ」[#]と「ポーン」當時は「マイン」河畔の「フランクフルト」にゐたが、今は「ブレス

ラウ」大學の教授であると記憶するが「獨逸國民經濟學に於ける現時の危機」(Die gegenwärtige Krisis in der deutschen Volkswirtschaftslehre)と題して政治と經濟學との關係を考察した百三十六頁の論文を公にしたのは千九百十一年の聖靈降誕祭の頃である、彼れが此著の目的とする處は主として同國の經濟學が講壇社會主義化せることによりて、之れが科學的特性を失ふに至つたことを明かにすると共に、併せて此學の發達を可能ならしむる爲めには須らく同主義を脱して純乎たる科學的研究其者に復歸す可しと云ふのである、即ち彼れは同書の緒言に於て「現時、專問的な獨逸の國民經濟學に對して多くの批評家が承認する處は、此學が危機の状態に存してゐることである、而して此學をして斯くの如き状態より脱せしむる爲めには、一般に講壇社會主義と稱せられてゐる傾向の下にある政治的、道德的見地から離脱するが、然らずんば經濟其者が客觀的な科學たる地位を辭す可きことである」(一)と、其他、彼れの書中には到る處に講壇社會主義に對する不滿の聲を以て充たされてゐることは、例者、同書十九頁に「講壇社會主義によつて與へらるる批判の本質は眞の科學的精神の表現でなくて、寧ろ政治と科學の混一状態である」と、同書の五十

六頁から五十七頁にかけて「經濟政策概して總ての政策上の計畫を立つる場合に於て、既存の設備又は状態を批判する如き純乎たる科學的理性的考察に訴えな

いのである。即ち其處には常に或特定の倫理的商量國家の任務に對する或特定の解釋、更に社會的發展の特定の理想から與ひらるゝ價值批判の存するのみである」と特に彼によつて攻撃の中心に撰ばれたのは「エベルスタット・ウァルブラント」の如き第二流の人物である。即ち彼自からの云ふ處によれば、所謂學派と稱せらるゝもの、科學的缺陷は創業の時代でなくて寧ろ之れに次ぐ時代に於て著しく現はれるものである。斯くの如きは講壇社會主義に於ても吾人の認むる處で即ち此傾向の創成者又は初期の指導者は現時の經濟組織及之れが改革的方法を批判するに當つて多少注意深き手加減を用ひたのであるが、所謂第二次の時期を代表する人物に至つては斯くの如き先輩の注意と顧慮とを忘れてゐるのである。(二)と、要するに彼の求めんとする處は現時に於ける獨逸經濟學の哲學化である。換言すれば此學を發達せしむる方法として哲學者が經濟學者に代つて、之れが純理的研究に従事するか、然らずんば經濟學者其人が眼界の狭小な政治的見地に代ゆるに哲學

的科學的考察を以てす可しと云ふのである。

更に政治的要求よりも科學的認識を重んずるを以て國民經濟學發達の最も重要な條件と見做すものに「ユリウス・ツォルフ」がある。彼れは「勞働せざるものは食するを得ず」各人は他人の汗によつて生活するを得ずと稱する如き倫理的起點に於て必ずしも講壇社會主義と異なりたる見解を有するものにあらざるも、然かも兩者は經濟組織に對する態度と社會的理想とに於て相同じからず、先づ前者に就きて「ウァルフ」の見る處は講壇社會主義を以て調和共者に一般經濟組織の自然的發展を認めずして寧ろ之れが利害關係の衝突する方面に求めんとするものとなし、更に同主義によりてなざるゝ社會的改革の缺陷として次の四點を擧げてゐるのである。即ち(一)經濟組織の本質と之れが機械的作用によつて條件付けらるゝ社會的發展に對する誤謬、(二)社會的改革が齎らす可き任務に關して當然第一の誤謬より生ずる缺點、(三)社會改革の用に供せんとする手段の不透徹なること、(四)吾人を類と之れが發展力とを誤解せることである。更に社會的理想に對して「ウァルフ」の懷抱する處は所謂「進歩其者を以て民衆よりも寧ろ卓越せる個人に求むるもので、此

點に於て講壇社會主義とは相納れずとなすものである。最後に「カール・ヂール」は其著「穀物關稅論」の冒頭に於て「國民經濟學者にして今日穀物關稅問題の觀察に従事する者は先づ之れが解決に先ちて、此問題には概して科學が解決を與へ得るものなるや、果た政治上の問題に屬するものなるやの點を明かにすることが必要である。國民經濟學者は科學的な方法によつて穀物關稅は國民經濟上果して有害なるか、或は有效なるかの問題に答へ得可きか、國民經濟に關した問題を科學的に取扱ふ場合に於て之れが限界上の論争に就きて、吾人の常に耳にせし處は國民經濟學者は科學者としては概して經濟政策上の問題を解決するよりも、寧ろ單に經濟上の理論及經濟史の問題に止まるのみで、彼れが科學者として解答し得る點は如何にして吾人の經濟的狀態は齎らされしか、如何に發展せしか、即ち彼は個々の經濟的現象の因果的關係を求むるのみで、當面の問題は科學者の關する處にあらず、或種の經濟的制度を變化し繼續し、排除せんとすることは科學の範圍内に存しないのである。「マックス・ウェバー」及「ゾムバルト」は科學的經濟學が政治上の問題に對して權威を振ふ可からざることを熱心に主張してゐるのである。「三」と此見地よりし

て彼れは同書二十二頁に於て「吾人は茲に文献的觀察を終るに當つて「ブレンタノ」によつて代表せらるゝ自由主義の論議は何れの方面よりするも經濟學の創建者として同情を得るものにあらざることを充分に現せり」と更に其二十三頁に於て「ブレンタノ」教授が穀物價格と之れが關稅との關係を説明せる點は嚴密なる科學的研究によれるも彼れが之れよりして商業政策上の結論を齎らす點は再び政治家的態度を學べりと。

之れを要するに科學と政治との混同せる點に於て此主義の科學的價值を疑ふのは以上、諸氏の所論の歸着する處である。

I. Ludwig Pohle, Die gegenwärtige Krisis in der deutschen Volkswirtschaftslehre. Vorwort.

II. Ludwig Pohle, s. 20.

III. Karl Diehl, Zur Frage der Getreidezelle. s. 1

六

千八百六十三年四月或會合に於て「フェルヂナント・ラッサール」は當時彼れが四日前に受取つた「ヒルネブラント」教授「キーナ」の國民經濟學及統計年報誌上に於ける論文に就いて「諸君、斯くの如きは何等新しきものでなくて、只だ其區別點は以前

佛蘭西革命によつて主張せられしものが、今は獨逸の大學教授によつて唱へらるゝことである、之れは科學と正義の勝利である」と云つてゐるのであるが、事實講壇社會主義は吾人の經濟生活上、新しい世界を見出したものでなくて、寧ろ舊き思想を實現せんとする「行爲」の經濟學である、既に思惟よりも行爲を重しとすることは自から政治的色彩を有することとなり、斯くして認識的價値を力説する論者より批難攻撃の的となるに至つたのである、(完)

Julius Wolf, Die Volkswirtschaft der Gegenwart und Zukunft, s. 28.

雜 録

アンドリュー・ヤラントン
の經濟論

高橋誠一郎

Patrick Edward Dove は、一千八百五十四年、其の著 Elements of Political Science. 2) An Account of Andrew Yarranton, the founder of English Political Economy. の一篇を追録し、又之れを別冊として刊行し、Andrew Yarranton を以て「英國に於ける經濟學の真正なる創設者なり」と呼ぶ。Dove が推獎の辭の當否は姑く措き、Yarranton が一千六百七十七年を以て

倫敦に於て出版したる England's Improvement by Sea and Land to outdo the Dutch without Fighting, to pay Debts without Moneys, to set at Work all the Poor of England with the Growth of our own Lands to prevent unnecessary Suits in Law; with the Benefit of a Voluntary Register. Directions where vast quantities of Timber are to be had for the Building of Ships; with the Advantage of making the Great Rivers of England Navigable. Rules to prevent Fires in London, and other Great Cities; with Directions how the several Companies of Handicraftsmen in London may always have cheap Bread and Drink. は第十七世紀の經濟書中に在りて最も特色あるものなる可し。

Andrew Yarranton が生死の年月は明確を缺くも、凡そ一千六百十六年より同八十四年若し